

山陰地方における弥生時代の海水準について —遺跡立地からの検討—

田 中 義 昭*

On the Sea Level of the Yayoi Period in San'in District —Examined from the point of view of the location of sites—

Yoshiaki Tanaka

はじめに

山陰地方における原始・古代史研究の最近の一達成として、中海・宍道湖沿岸の低地遺跡を対象に進められた、完新世海水準変動の解明がある。徳岡隆夫・中村唯史等によれば、縄文前期のいわゆる「縄文海進」時には+1m以上の海面上昇が認められ、弥生時代末～古墳時代初頭の海水準は「-1.3～-0.2mの間」まで低下した。その後反転して1m程度上昇したとされる(徳岡・中村・大西・高安, 1995年)。中海・宍道湖沿岸の低地性遺跡の調査と連動して進められたこれらの研究に即応して、沿岸地域における完新世古環境と生産諸活動の連関について、より具体的な分析と理解が可能になろうとしている。竹広文明は縄文・弥生時代の汽水域漁撈活動について従来の沿岸低地遺跡調査の成果を再吟味し、その実相と特性についての見解をおおやけにした(竹広, 1996年)。また、林正久は荒神谷遺跡のバックグラウンドと出雲平野の形成について論じている(林, 1996年)。

筆者が関心を抱く弥生時代集落論の場合、海進の反対現象としての海退、もしくは別条件による沖積化の進行にともなう陸地の生成と拡大に関心がもたれるところである。このことに関しては、すでにいくつかの見通しが立てられてはいるものの、組織的な検討は未だしの観がある。初期農耕段階(弥生期)の地域社会の成立と展開の究明が、狩猟漁撈採集を基本とする獲得経済史の解明と同様に地域の原始・古代史研究の重要課題であることはいうまでもないが、生産活動の直接的な基盤となる沖積平野形成過程の追跡は、当然課題中の必須達成項目といつてよい。

本稿は、中海宍道湖沿岸はもとより、山陰沿岸各地の弥生期低地遺跡を対象に、当該地域の沖積平野形成と農耕集落の展開の相関を海水準の変動を軸に追跡して、そ

の動態と地域による相違が、はたして見出されうるのかを検討したい。

1. 弥生時代低地遺跡の実相

i 目久美遺跡(米子市目久美町258番地一帯)、(小原他, 1986年)

米子平野の北西隅、中海南東の一角の懐状になった山丘裾部の沖積地に位置している。遺跡の広がり東西約150m、南北約100mと推定されるが、弥生時代の遺跡範囲そのものは不明である。調査区からえられた諸事実を総合すると、丘陵裾の緩斜面から沖積地に移行する個所に集落と水田が営まれていて、その継続期間は弥生前期から後期に至ると考えられる。

検出された遺構には水田址、土坑群、柱穴群、溝状遺構、土器溜め等がある。まず、陸化状態を知る手掛かりとして水田址を取り上げよう。標高+1～+2mの緩傾斜地に、等高線に沿って面積約30m²の方形～長方形水田が造成・使用されている。水田面は3面捉えられ、それぞれ断続的に利用されたものとみなされている。時期的には前期後半から中期末までで、最上部の第1水田面(中期後半)のレベルは+1.09～+2.05mと測定される。つまり弥生前期後半以降は+1m以上の地が水田開設可能なレベルであったということになるか。また、最下部の第3水田面下の「6-1層」からは前期の土器が多数出土している。層のレベルは+1m程度だから、この点からも弥生前期から中期末ころまでの低位の陸地環境は、ほぼ似た状態にあったことが推定されよう。

水田址東側の微高地上には多数の土坑群が検出されている。その大半は中期に属するが、前期のものが数基ある。坑の用途としては埋葬用、貯蔵用、祭祀用等が想定され、一部は住居址の可能性もあるという。いずれにしても、標高で+1.6mから+2.1mまでの高位部分は弥生前期から中期末ころまでは安定した居住区(一部墓域も含む)をなしていたと判断してよい。後期には、これら

* 島根大学法文学部行動社会教室

居住区と水田は洪水によって埋まり、再開発は行われていない。大西郁夫は、「弥生時代中期をすぎると、海退がさらに進んでいて、水田化が可能な低湿地が、平野の中心部に広がっていた可能性がある。そのため、砂に埋まった水田を放棄して、平野の中心に移住したものと考えられる」としている（大西、1986年）。ただし、河川状遺構からは後期後半の土器や木製農具が検出されているので、近辺に集落が存在したことは考慮しておく必要がある。

目久美遺跡は、南から北に弧状に連なる低丘陵の西向きの裾部分（波蝕台か低位段丘面）に立地している。つまり、北西に懐状に開く標高+1.0~2.0m 強の低地面に集落と水田が営まれたとみられる。序いでに言えば、石錘、土錘が多量に出土していることと、マダイ、クロダイ、スズキ、ブリ、マグロ等の魚骨が検出されていることからして、当然ながら、沿岸、沖合漁業の操業に相応しい港の施設があったことを想定しうる。あるいは、背後の丘陵が狩猟のフィールドをなしていたことも多くの石鏃やイノシシ等の獣骨の存在によって明白である。

ii 西川津遺跡（松江市西川津町字海崎・大内谷・宮尾坪内・原の前）、（村尾他、1975・1982年。内田他、1988・1989年。西尾他、1995年。田中、1996年）

西川津遺跡は松江市市街地の北東部にある持田平野の南縁に位置する。遺跡は朝酌川が形成する沖積地と丘陵の裾部にかけて広がり、その範囲は南北約1km、東西約200mの帯状をなすと推定される。これまで上流部の海崎地区から下流に向けて、大内谷地区、宮尾坪内地区、原の前地区で調査が行われている。弥生時代の遺構としては、海崎地区で掘立柱建物跡、貯蔵穴、「ウッドサークル」等の遺構群が、原の前地区で古墳時代初期の船着場の遺構が発見されている。その他の地区でも遺物包含層が検出され、それらの形成過程に関しては入念なチェックが行われた¹⁾。その結果、低湿地遺跡の生成状況が詳細に把握され、かつ海水準の考察にとっても貴重な事実が確認されている。以下、遺構群のありかたから遺跡の立地について検討しよう。

〈海崎地区〉（第1図）この地区では弥生前期と中期の遺構群が重複する形で検出されている。弥生前期の遺構としては溝状遺構と「ウッドサークル」があり、ブロック状貝塚が4カ所（「貝層 F, G, H, I」）、それに「貝層 J」の下部には「竪穴住居跡であった可能性も捨て切れない」とされる長方形の「土壙状」遺構の存在したことが記録されている。溝状遺構は朝酌川の自然流路で、その流下による流路開削の上限は縄文後期ごろとされる。調査区内では北西から南東方向の流れとして確認されているが、北側で検出された遺構群の分布から、この付近で

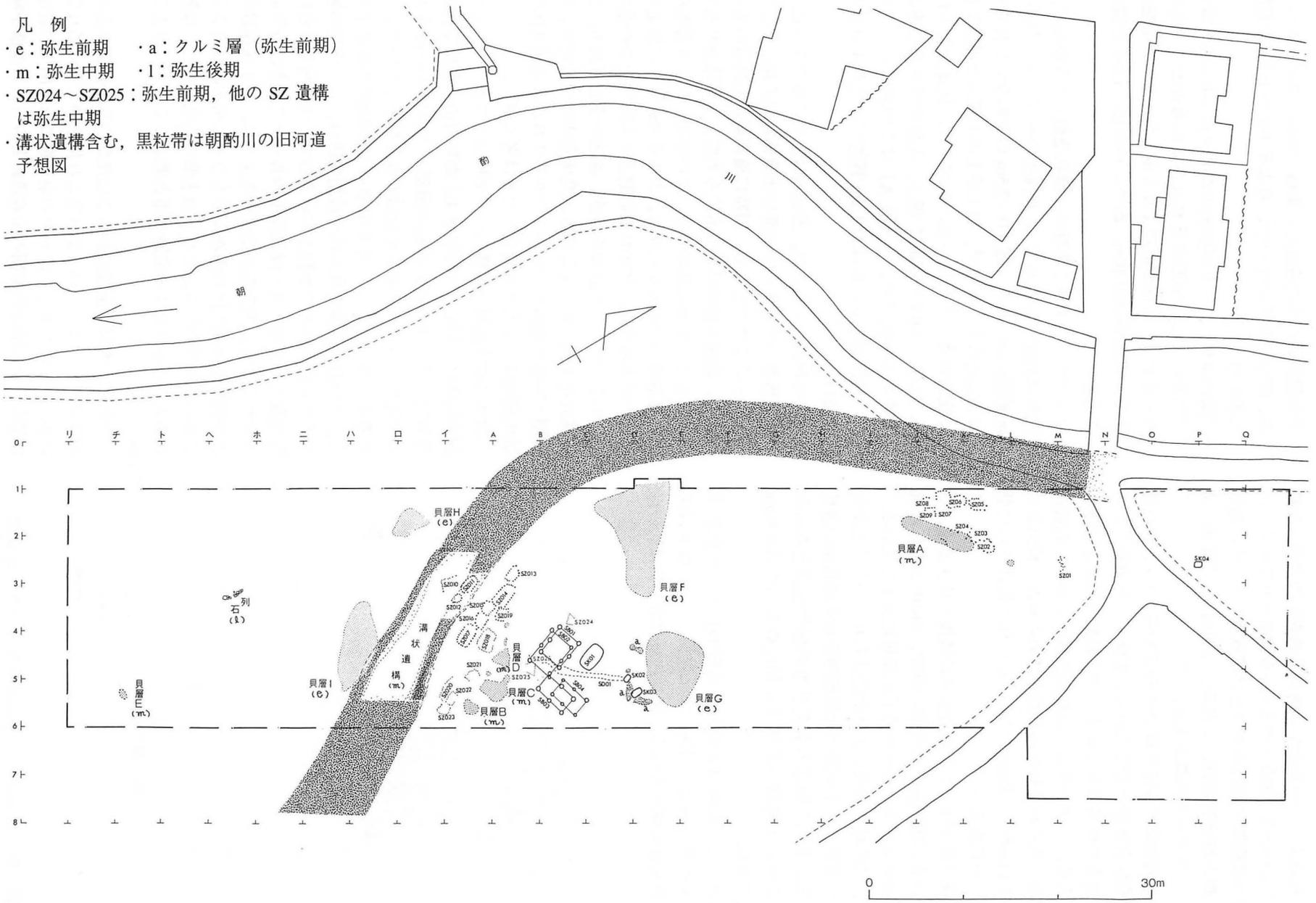
は北東—南西方向の流れを想定できる。おそらく、調査区付近で大きく蛇行して流路方向を変えていたのであろう。川中は調査区の断面図でみる限り40m以上はあったと思われる。

ただし、右岸（南側）は流れの攻撃面となっていたためか、やや削り込みが激しく、自然堤防の載面をかなり明瞭に確認することができるが、左岸（北側）はきわめて緩い傾斜面をなしており、どこまでが流路の最大巾であったかは俄かに定め難い。なお、流路内には砂質の堆積物があり、ある程度の水流が常時あったことを推定しうるし、そこを川底の一部分とみてよいと思われる。なんとすれば、左岸斜面には「ウッドサークル」や貝塚が遺されており、少なくともこれらの遺構群が水流中に設けられたとは考え難いからである。

そこで、陸化の進行程度を探る一つの目安として遺構群の標高を以下検討してみる。

- ①「土壙状」遺構：「溝状」遺構の右堤上で検出された「貝層 J」下で所在が確認されている。詳細な実測図が示されていないので類推によらざるをえないが、遺構が掘り込まれた「最下層」の上面レベルが+0.1m 強と算定されるから「遺構」の底は、おそらく-0.2~-0.3m ぐらいであろう。これが、いわれるように「住居跡」であるとするならば、底は床面となるから推定したレベルが少なくとも地下水の心配のない、居住に適した地位ということができようか²⁾。
 - ②「ウッドサークル」：細長い丸杭を円形に立て並べ、内部に木製容器の材料を保管した施設とみなされる遺構である。したがって底部は滞水していて、保管材は常に水浸状態に置かれたと判断される。底のレベルは0~-0.4m 程度と測定できる。構築された個所は左岸の緩斜面である。
 - ③「貝層」：溝状遺構（自然流路）の両岸に2カ所ずつ検出されている。ヤマトシジミを主体とする貝層である。「貝層 F」は上記したが、その南に「貝層 G」があり、対岸に「貝層 H」と「貝層 I」がある。いずれも海拔0m 前後に位置しているが、食物等の残滓捨て場として利用されていることからすれば、そこは安定した干地と泥地の中間的な陸地部分に相当する場所と考えられる。
 - ④溝状遺構：溝底のレベルが、ここでは問題となる。北壁断面では、それは-0.7m、南壁断面では-1.0m ぐらいと測定できる。
- 以上が海崎地区における弥生前期の陸化状態診断の標高値である。これを見ると通常では-0.4m 辺りが貯蔵・廃棄施設を含めた集落域の土地レベルの下限面であったと判断してよいのではないか。続いて弥生中期段階のレ

- 凡例
- ・e: 弥生前期
 - ・a: クルミ層 (弥生前期)
 - ・m: 弥生中期
 - ・l: 弥生後期
 - ・SZ024~SZ025: 弥生前期, 他のSZ遺構は弥生中期
 - ・溝状遺構含む, 黒粒帯は朝酌川の旧河道予想図



第1図 西川津遺跡・海崎地区弥生遺構分布図 (内田他, 1989年より, 改変)

ベルを検討する。対象となる遺構は調査区の北部（北群とする）と中央部（南群とする）から検出されているが、中央部の遺構群は前期のものとはほぼ重複している。種類として掘立柱建物跡群、土壙群、「貝塚」、「溝状遺構」、ウッドサークル群がある。

⑤掘立柱建物跡：4棟が確認されている。1×2間の建物で高床倉庫址と考えられる。2棟ずつが重複し、方向を違えて検出されているので2時期にわたる倉庫址といえる。一部の柱穴には柱根が残っており、穴底には礎板とみられる板片の存在が認められた。検出面のレベルは+0.7~+0.9mであるから柱穴底はさらに低いレベルになろう。

⑥土坑群（第2図）：⑤の倉庫址に隣接して3基検出されている。隅隅長方形の浅い坑で、SK01とされた坑からはヒョウタンとその種子が多量に出土している。また、この坑には低い上屋が設けられていたことが判明しており、弥生中期の貯蔵形態を示す興味深い遺構である。他の2坑は木製農具等の保管施設とみられる。これら土坑群が位置する個所のレベルは+0.9m程度である。

⑦「貝塚」：「貝層 A」から「貝層 D」までが弥生中期のものとする。 「A」は北群に、「B」以下は南群にそれぞれ属している。後者の「貝層」群は⑤の掘

立柱建物跡の南に隣接し、東西一列状に並ぶ。レベルは、明示されていないが、およそ+0.2~0.4mの範囲と思われる。

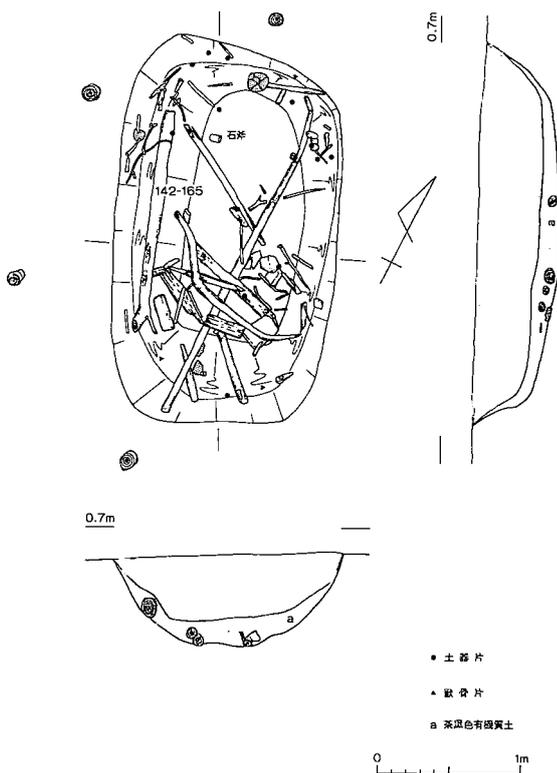
⑧「溝状遺構」：これが朝酌川の旧河道であることはすでに述べたが、中期のそれは左岸の載面がやや急になっており、流速が前期よりも少し早くなった気配がある。流路巾は約10m、底のレベルは-1.0mと測定できる。

⑨ウッドサークル群：南群は「溝状遺構」の左斜面で、流れに列状に沿う形で13基検出されている。長さ1m前後の細い杭を一辺1.0~2.5mの方形ないし長方形に立て廻らしたもので、加工途上の木製品を浸して置く施設と考えられている。レベルは、杭頭が約+1.0m、底面で+0.2~0.8mを測る。北群では9基が南北に並んで検出され、「貝層 A」はこの列に沿っている。検出面のレベルは約1.2m程度で、南群よりはやや高い。

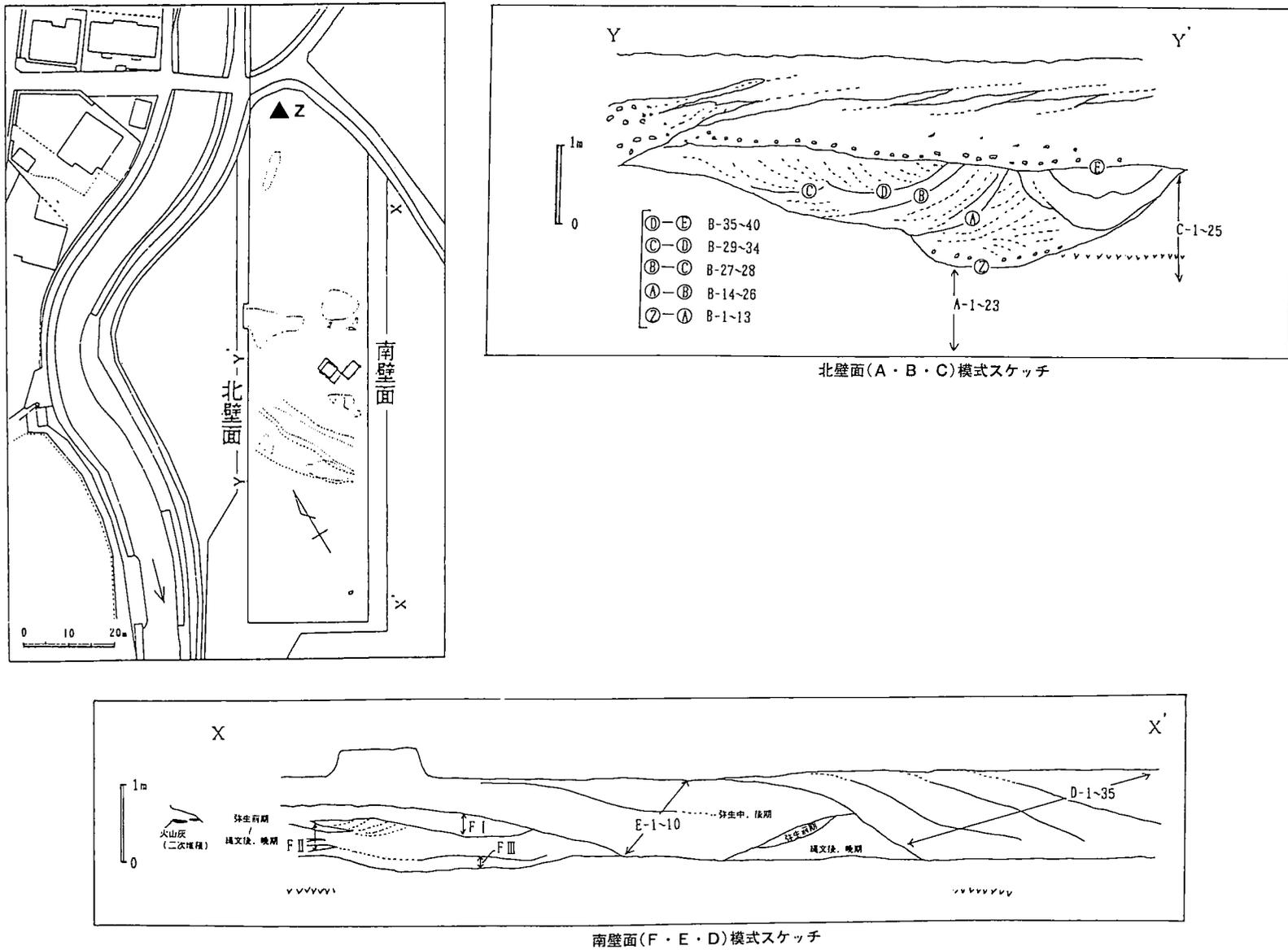
以上の検討からすれば、旧河道は、先にみたように、北の遺構群の西側から中央部の南遺構群の南側に接していたとすることができる。同時に遺構群が有機質のもの保存、貯蔵を目的に地下水位を考慮して構築されたものであることが知られるので、この時期、つまり弥生中期の集落域の下限面レベルは、およそ0m付近に想定してよいであろうか。とすれば前期よりも陸化がやや進行しているということになろうか。流速の変化等にも、なお検討の余地があるとしても、高床倉庫址や「貝層」が前期・中期と重複していることからすれば、海崎地区の居住環境はそう大きく変化したとは考え難い。

次に弥生後期の遺構について検討しておこう。この期の遺構は「列石」と「貝層 E」が旧河道の右岸で検出されている。「列石」の石の頂部レベルは+0.2mを測ることができるから地下水位はかなり低下していたことが考えられよう。この点を南壁の土層断面で検討すると、「列石」遺構を含む弥生後期の層は、前・中期の層を大きく削り込んで堆積しているので、中期後葉ころに相当激しい水流による侵食作用のあったことを読み取ることができる。調査者が指摘するように、弥生後期以後には朝酌川は調査区の南端よりもさらに南を流れるようになったと思われる。これも海水準の変化、もしくは陸化の大きな前進による流路変遷と考えることができようか。

ただし、西川津遺跡においては後期の集落に関する情報はひじょうに乏しい。よってこれ以上のことは語れないが、幸いにもより下流の原の前遺跡で、朝酌川の右岸に築かれた古墳時代初期の船着場跡とみられる遺構が検出され、そこでの海水準が±0mと判定された。これに

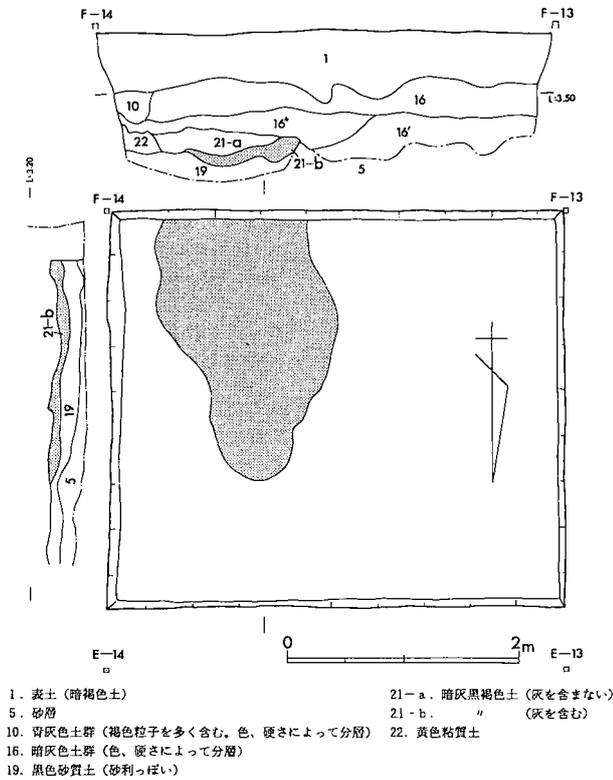


第2図 西川津遺跡・海崎地区のヒョウタン貯蔵穴 (SK01・弥生中期) (内田他, 1988年より, 一部改変)



第3図 西川津遺跡・海崎地区の発掘区平面図と断面図（故大西郁夫教授，1989年）

左上図：調査区の平面図
 右上図：調査区北壁断面図 } この両図によって弥生前期～後期にかけての旧河道の変遷を首尾よく理解できる。
 下図：調査区南壁断面図 } 弥生中期の壁を大きく削り込んで後期以降の壁が厚く堆積していることに注意。



第4図 矢野遺跡第3地点の灰溜り皿状穴(弥生中期後葉) (田中他『出雲市矢野遺跡の発掘調査報告』1989. 鳥根大学より)

よれば海崎地区から0.8km下流辺りにまでは安定した陸地が広がっていたことを推定でき、当然ながら、その間の微高地状の高まりには集落が営まれ、やや低い土地の葦原に水田が開かれていたと想定される。

iii 矢野遺跡(出雲市矢野町), (山本, 1957年. 出雲考古学研究会, 1986年. 田中他, 1987年. 田中・西尾他, 1989年. 出雲市教育委員会, 1991年. 田中, 1992・1996年)

矢野遺跡は出雲平野のほぼ中央にあり、斐伊川と神戸川によって形成された微高地上に立地する。弥生土器の散布範囲は南北約600m, 東西約300mを計測できる。便宜的にこれを六地点に分けて調査が進められてきているが、うち第1, 第2, 第3地点で発掘が行なわれている。第1地点からは弥生中期の住居址と土壙墓, 祭祀遺構, 古墳時代初期の土壙墓, 住居址を, 第2地点では古墳時代前期の住居址を, そして第3地点では炭化物や灰の充満したピットをそれぞれ検出している。

第1地点は, 弥生土器の散布量がひじょうに多く, 時期的には前・中・後各期のものが認められる。とくに中期後半からの土器の多さが注意を引く。また, 本地点にはヤマトシジミを主体とする貝塚が残っており, 遺構群の遺存状態からみてもここが矢野遺跡全体の中心域であった可能性がきわめて高い。上記の例にしたがって検

出遺構のレベルを検討してみよう。

第1地点の地表面の標高は, +4.1~4.5mである。基本層序は耕作土下に褐色土, 黒色土があり, さらに砂質の黄褐色土層が続き, 最下部は三瓶山からの供給とされるデイサイト礫を含む砂層・基盤層へと移行する。この層は出雲平野に広く分布し, 層厚が20mに達するところもあるとされている。弥生・古墳時代の遺構は, 多くの場合, 基盤層上に堆積する黄褐色土層から検出されている。換言すれば, 黄褐色土層が堆積するところには住居址等の遺構が存在するとしてよい。

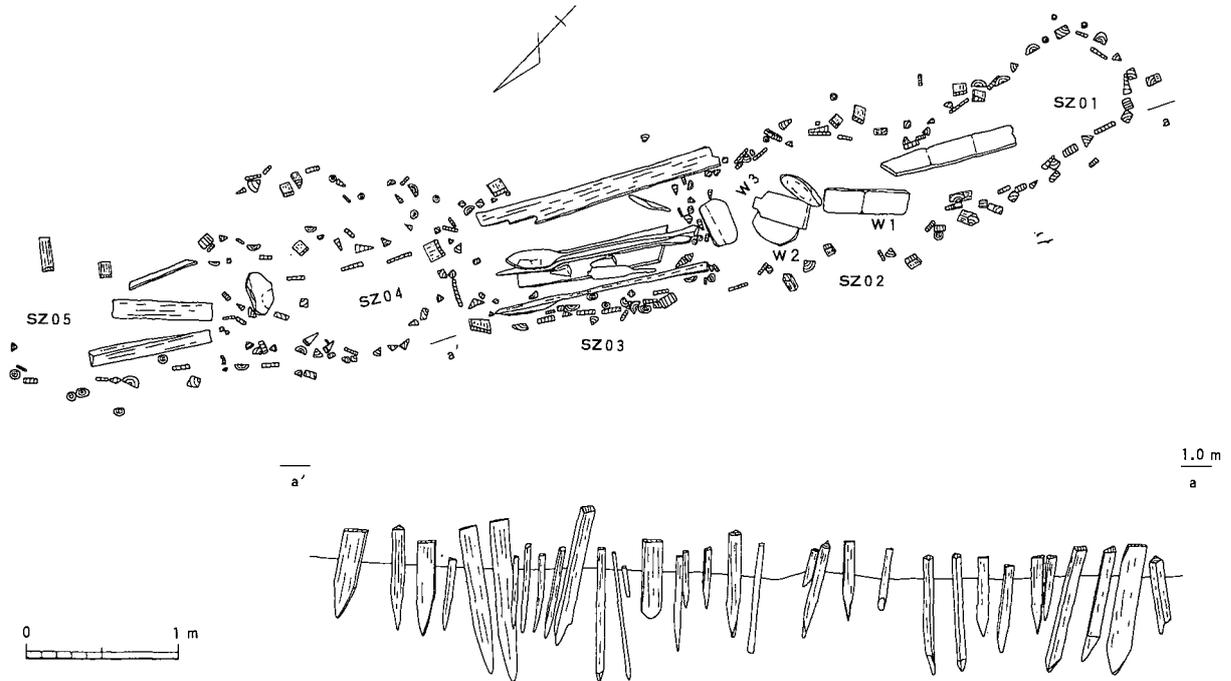
第1地点は, これをA, Bの二区に分けて調査した。A区では弥生中期と古墳時代初期の土壙墓群, 弥生中期の竪穴住居址を検出。B区では弥生中期のイノシシの頭骨を納めた祭祀遺構, 後期の貝塚, 古墳時代初期の住居址を検出している。まず住居址の床面のレベルを問題にしよう。A区の住居址床面は基盤層最上部に設けられており, その標高は+3.1m。弥生中期の土壙墓の壙底レベルは+3.2mである。B区では黄褐色土層に設けられた古墳時代初期の住居址床面が標高+3.3mと測定された。黒褐色土層で検出された祭祀遺構は標高+3.25mである。

第2地点では地点の西端で古墳時代初期の住居址を検出している。この住居址の検出面は黄褐色土層上面で, 床面は砂層中に設けられていた。レベルは+2.75mである。

第3地点は第1地点の北にあり, 弥生中期末の炭化物と灰が詰まった大規模な皿状のピットを検出している。そのレベルは+2.8mである。

出雲平野では弥生後期から古墳時代初期にかけての貝塚が矢野遺跡, 古志本郷遺跡, 知井宮多門院遺跡で発見されている。これらは「神戸水海」と呼ばれたかつての汽水湖の岸沿いに位置しているとみられ, これらの分布から弥生後期ころまでの沖積地の広がりをも想定することが試みられ, 居住が可能なレベルは標高+5mと算定されていた。矢野遺跡の調査は, こうした地表レベルからの考察を一步進めて, 弥生時代から古墳時代初期までは少なくとも+2.7m以上が集落造営可能地であったことを明かにしたといえる。

ところで矢野遺跡の西800mにある白枝荒神屋敷遺跡は「神戸水海」にもっとも近い集落址として関心がもたれていた。近時の調査結果によると, この遺跡でも黄褐色土の堆積が広く認められ, 土器溜り等の遺構も検出されている。出土土器は弥生中期後半から古墳時代にかけてのものであるが, 弥生後期の土器, 古式土師器の出土量がきわめて多く, 集落遺跡としてかなりの規模と継続性をもっていたことが知られた。ちなみに, 黄褐色土層上



第5図 川向遺跡のウッド・サークル（弥生中期）（長峯他，1993年より）

面の標高は+2.8m 前後という。弥生中期後半からの集落の広がりや標高の相関関係を示す注目すべき事実である³。

iv 川向遺跡（迹摩郡迹摩町大字仁万）（長嶺他，1993年）

川向遺跡は、仁万平野の西北で東向き丘陵先端に近い沖積地に立地している。検出された遺構は割材等で作成した杭を円形に打ち込んだウッドサークルで、10基が連鎖的に並んでいる。これらの中には未完成の各種木製農具等が残っており、加工途上の木製品を保管する施設であったことが判明する。杭は前期弥生土器を含む層に打ち込まれ、遺構全体は弥生中期の土器を大量に含む土層で覆われていた。したがって、遺構の年代は弥生中期と判断される。中期土器でも中葉以降のものが目に付くが、後期のものはごく少量であった。ウッドサークルで木製品が置かれている面のレベルは標高+0.2m 程度と測定できる。先の西川津遺跡の例のように木製品は水に浸されたとすれば、この+0.2m と測定される地面付近に海水準 0m を想定することができよう。

3. 弥生時代陸地形成と海水準

以上、山陰地方の沿岸部に立地する弥生時代集落の占地レベルと、そこに認められる陸地の進行程度を個々の集落址の実態に即して検討してみた。これを要約するならば凡そ次ぎのようになる。

i) 弥生前期の海水準を推定する目安となる事実としては、目久美遺跡の水田址と西川津遺跡海崎地区の前期遺構群の標高測定値がある。前者は+1m、後者では

「住居址か」とされる「土壙」底が-0.3~-0.4m で、差し当たりこれらの数値が水準推定に有効と思われる。よって、居住地の乾燥度や水田の塩害の排除等を勘案すれば、前期段階の海水準を 0m より若干下位に想定することが可能と思われるが、周辺の地形が十分把握仕切れていないことを考慮すれば、少なくとも-0.4m 以上に設定することは困難という程度に押さえておくのが妥当であろうか。しかし、一帯の堆積環境との関連でいえば西川津遺跡よりも下流に位置するタテチョウ遺跡で、弥生前期から中期中葉の堆積層で、朝酌川の河口付近に形成された地層とされる「12層」の下位レベルが標高-1.3m とされていることは参考となる（柳浦他，1987年）。また、川向遺跡の弥生前期層の下位レベルが-1.2m と測定できることも上記の想定と矛盾しない。徳岡・中村等が算出した「-1.3~-0.2m」の範囲でもより低いレベルを弥生前期の海水準とするのが実態に近いのかもしれない。

ii) 弥生中期に関しては西川津遺跡・海崎地区の中期遺構群、矢野遺跡第1・3地点遺構群、川向遺跡のウッドサークル等の標高が推定の拠り所となる。海崎地区の場合ウッドサークル群と「貝層」群のレベルが±0~+0.8m の範囲に収まり、ヒョウタン貯蔵穴が+1.0m 以下に設けられていた。矢野遺跡では第1地点A区検出の住居址と墓壙が+3.0m 辺りにあり、第3地点では底レベル+2.8m の皿状ピットが存在した。川向遺跡のウッドサークルの底レベルは+0.2m である。

これを前期と対比すると、多少ハイレベル化の観が

ないでもないが、これをもって海水準の微上昇現象と理解することもできるが、検討の余地はなおあるように思われる。むしろ、白枝荒神屋敷遺跡で検出された黄褐色土層の標高+2.8mや松江市布田遺跡の中期遺構群がなべて+2.0m前後の標高を示していることに注目する必要があると思う（足立他、1983年）。予想も交えてだが、中期段階には沖積地が安定して乾燥度が高まり、居住条件がより好適になったのではなかろうか。また、陸化も大いに進んでいったことを読み取ってよいのではないと思われる。それも出土する弥生土器の型式から中期後半の現象として捉えうる点に興味をもたれる。さらにいえば、かかる現象は、日本海沿岸の地域の中でも内水域をかかえる中海・宍道湖沿岸がより活発であったように見受けられる。

iii) 弥生後期に関しては西川津遺跡・海崎地区の「列石」遺構のレベルが一つの指標を与えてくれる。+0.2mである。この他に参考にすべき事実として原の前遺跡で検出された古墳時代初期の船着場跡とみられる遺構のレベルがある。ここでは当期の海水位の最高値が±0mと測定された。弥生前期の遺構群と大差ない測定値ではある。これをみれば、少なくとも後期段階に入っても海水準に特段の変化があったとは考えられないが、彼の船着場が朝酌川の河口からやや遡った位置に築かれたとすれば、持田平野の沖積化、陸地の拡大は、なお前進を続けていたと判断してよいのではないか。先の白枝荒神屋敷遺跡では後期から古墳時代前期にかけて集落としての繁栄ぶりが推測されるが、このことは中期後半以来進行した陸地の拡大に負っているとみて差し支えない。同様な事実を他に求めて観察を補うならば次ぎの例が有効である。

鳥取県岩吉遺跡は千代川が形成する鳥取平野の西北に位置し、弥生時代から古墳時代の拠点集落跡として知られている。この遺跡ではA・B20~26区とされた地点において弥生中期後葉から後期中葉までの土壌や溝状遺構が重複状態で多数検出されている。同じくA・B2~6区にかけては古墳時代前期と弥生後期の水田址が確認されている。これらの標高は、凡そ+1.5m前後の範囲にあって、20~26区の遺構群と併せ考えると弥生中期後半ころから+1~2m程度のレベルの安定した陸地が広汎に形成され、平野の中核的集落成立の条件が整えられるつつあったことがわかる（谷口他、1991年）。

以上の諸事実から弥生時代全期を通じてどの程度の海水準の変動を明確に描き出しうるかはなお困難であるが、大西が目久美遺跡での海水準の検討から弥生中期以降にも海退が進み、米子平野の中心部にも水田が開かれ

るようになり、集落が進出したと予測したこと（大西、1986年）。荒神谷遺跡のヒンターランドとして出雲平野の形成を検討した林が、いわゆる「弥生小海退」は「2.600年 B.P. までに終わった」とし、さらに「風土記時代」までには現在の平野の半分程度が陸化していたと推定している（林、1996年）ことなどに導かれて概括的に考察するならば、縄文晩期から弥生前期にかけて頂点に達したとされる海退は大勢的には停滞状態にあったと推定され、弥生時代中に再び海進に転じたとする積極的な徴証は、なお、認め難いとしてよいように思われる。同じくこの間にあって、とりわけ中期後半ころから沖積地の形成が顕著になり、集落立地と可耕地拡大の条件が大いに広がったことを推測しえたわけである。

4. おわりに

山陰地方の弥生時代の動向を探るうえで日本海沿岸、中海・宍道湖沿岸の低地に位置する集落遺跡の実態を解明することはきわめて重要である。この課題は早くから考古学的地域研究の俎上にのぼっていたにもかかわらず、研究の遂行と成果の蓄積はほとんどみられなかった。近年開発にともなう発掘調査がこうした低地遺跡に対して大規模に行われるようになり、ようやく課題達成の道が開かれるようになった。

本稿は、上記課題にこたえることを意図し、主として集落遺跡における遺構のありかたから弥生時代の海水準と陸地形成に焦点をおいて考察を試みたものである。すでに明らかなように弥生時代全体を通じての海水準の変動は、これを確かに見透すことはできないが、集落址における遺構群のレベルを検討することで、「弥生小海退」の停止状態もしくは、微上昇現象と中期中葉以降の顕著な陸化を予測することができた。

今後は、さらに自然科学分野との共同研究を緊密に進めることによって、海水準の確かな変動相を掴むことに努力すべきであると考えられる。その成果が未開上段の地域史の中身をいっそう豊かにすることに繋がると信じるものである。

註

1. 西川津遺跡の調査においては、鳥根県教育委員会と鳥根大学考古学研究室、鳥根大学汽水域研究センターが協力・共同して成果をあげている。各調査過程で発掘区の断面等を検討し、必要に応じて研究会をもつなど、この種の遺跡調査の望ましいスタイルをつくりあげている。それぞれの経緯と成果は県教育委員会が刊行する調査報告書に収録されている。
2. 「貝層 I」下で検出された長方形土坑は、揭示さ

れた写真で見ると、これを「住居跡」する根拠は見だし難いのではないだろうか。むしろ、人骨やゴホウラ製貝輪が出土していることから墓塚とするのも一考であろう。

3. 出雲市白枝荒神屋敷遺跡は、市道拡幅にともなう工事に先立つ調査が1993年から断続的に行なわれている。これまでに弥生後期から古墳時代前期の土器等が大量に出土し、弥生中期後半の土器、須恵器も検出されている。本遺跡がかなりの規模を有する集落址であることは確実であろう。この遺跡に関する知見は調査を担当した出雲市教育委員会の米田美江子、三原一将両氏の教示による。筆者も現地を実見した。

文 献

- 足立克巳他, 1983, 布田遺跡—松江竹矢町一。『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』, 鳥根県教育委員会他。
- 林 正久, 1996, 荒神谷遺跡周辺の地形環境。古代文化研究, 3, 31-50, 鳥根県古代文化センター。
- 出雲考古学研究会, 1986, 『古代の出雲を考える5 出雲平野の集落遺跡矢野遺跡とその周辺—』。
- 川上 稔他, 1991, 『出雲健康公園整備プロジェクト事業に伴う矢野遺跡第2地点発掘調査報告書』。出雲市教育委員会。
- 村尾秀信他, 1975, 『朝酌川改修に伴う西川津遺跡発掘調査報告書I』。鳥根県教育委員会。
- , 1982, 『朝酌川改修工事に伴う埋蔵文化財調査報告書II』。鳥根県教育委員会。
- 長峯康典他, 1993, 『潮川小規模河川改修に伴う川向遺跡発掘調査報告書(I)』。仁摩町教育委員会他。
- 西尾克巳他, 1995, 『朝酌川中小河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 原の前遺跡』。鳥根県教育委員会。
- 小原貴樹他, 1986, 『加茂川改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 目久美遺跡』。米子市教育委員会他。
- 大西郁夫, 1986, 自然科学分析 米子市目久美遺跡の花分析。小原編, 『目久美遺跡』, 66-77。
- 竹広文明, 1996, 海跡湖堆積物からみた汽水域の環境変化—その地域性と一般性—。科研報告・資料集, 鳥根大学汽水域研究センター。
- 田中義昭・西尾克巳他, 1987, 出雲平野における原始・古代集落の分布について。山陰地域研究(伝統文化), 4, 13-45, 鳥根大学山陰地域研究総合センター。
- , 1989, 『出雲市矢野遺跡の発掘調査(昭和63年度文部省科学研究費補助金(一般研究A)研究成果報告書)』。鳥根大学。
- 田中義昭, 1992, 出雲市小山遺跡第1地点の調査。『山陰地方における古代金属生産の研究』, 15-22, 古代金属生産研究会。
- 田中義昭, 1996, 弥生時代拠点集落の再検討。『甘粕健先生退官記念論集 考古学と遺跡の保護』, 1-18, 甘粕健先生退官記念論集刊行会。
- 田中義昭, 1996, 弥生時代拠点集落としての西川津遺跡。山陰地域研究(伝統文化), 12, 1-11, 鳥根大学汽水域研究センター。
- 谷口恭子他, 1991, 『中小河川改修事業大井手川改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査若岩遺跡』。鳥根県教育委員会他。
- 徳岡隆夫・大西郁夫・中村唯史・高安克巳, 1995, 原の前遺跡と周辺古環境。朝酌川中小河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書, 181-193, 鳥根県教育委員会。
- 内田律雄他, 1988, 『朝酌川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書IV(海崎地区2)』。鳥根県教育委員会他。
- , 1989, 『朝酌川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書V(海崎地区3)』。鳥根県教育委員会他。
- 柳浦俊一他, 1987, 『朝酌川河川改修工事に伴うタテチョウ遺跡発掘調査報告書II』。鳥根県教育委員会他。
- 山本 清, 1957, 『鳥根県出雲市矢野町貝塚調査概要』。(田中義昭他「出雲市矢野遺跡の研究(1)」『山陰地域研究』3, 1987年に再録)

あ と が き

山陰地方における弥生時代の集落遺跡の調査は、それらの多くが沖積平野に立地している関係上自然科学分野との連携、協力、共同なしには首尾よい成果をあげることは不可能である。幸い鳥根県教育委員会等の調査主体は、これまで意識的にこの関係を追求し、低地集落遺跡の解明に向けて多大な成果を蓄積するに至っている。

故大西郁夫教授がこうした自然科学分野の調査に積極的に参画して成果獲得に大きく貢献されたことは周知の事実であり、考古学と自然科学、とくに地質学が中海・宍道湖沿岸の遺跡調査において先進的な協力・共同の取り組みを進めるうえで中心的役割を果たしてこられたことも特記する必要がある。

本年2月、教授は闘病の末鬼籍に入られることになった。まことに残念という他はない。ここに謹んで哀悼の意を表し、拙い一文を草してその功績を偲び、さらに故人の意を引き継いでいっそうの成果をあげるべく努力することを誓うものである。